

## 物流の働き方改革に思う 羽田クロノゲートを見学

9月21日、会員37名で“クロネコヤマトの宅急便”でお馴染みのヤマトグループ（ヤマト運輸）が誇る巨大物流ターミナル「羽田クロノゲート」を見学した。

場所は羽田空港の近く。2013年の設立。物流に限らず、洗浄、印刷、メンテナンスなど、付加価値機能を備え持つ。「宅急便」は1976年に開始、宅配業の先駆けて、「宅急便」はヤマトの商標登録でもある。

最大の見どころは「物流棟」。365日、24時間稼働する。ハイテクベルトコンベアが、時速9.7kmで4800個の大小の荷物を瞬時に行き先毎に仕分けする。それをコンピューターで管理するのが、クロノゲートの頭脳ともいえる「集中管理室」だ。高い効率化と万全なセキュリティを追求している。仕分けされた荷物は、大型トラック100台規模が待つ、一階バースで人力で積み込まれ配送される。



一通り見学を終え、ヤマト運輸労組役員と意見交換。専任中執の三浦さん、東京支部委員長望月さん、そして、元委員長の伊野武幸さんら。伊野さんはながらくヤマト労組の委員長をされ、物流業界の労働の在り方など、変革期に会社と苦楽を共に改革してきた方で、話す内容にも説得力があった。課題は何と言っても人員対策に尽きるという。

クロノゲートには3500人。正規は800人。24時間操業のため、勤務形態も10パターンにも及ぶ。外国人パートも500人近くが従事。ダブルワークで働く者も多いという。ネット通販（アマゾン等）の普及で宅配の需要も飛躍的に増えている。

国を挙げての「働き方改革」が叫ばれているが、長時間労働と人材確保は、流通業界にとっても喫緊の課題。ヤマト運輸は、これまで人手不足から67000人にも及ぶ「残業代未払い」問題で社会的指弾も受けてきた。改善のため、昼休みや夜間の配達制限など改革にも取り組んできているが、宅配の「時間指定」や「再配達」の頻度など課題は多いようだ。

クロノゲートでの瞬時に仕分けされる機能。それを下流で支え時間との勝負でこなす多くの従事者。物流界（宅配業）の「働き方改革」には消費者自身も意識改革が求められるのではないかと。「宅配は翌日には届けられるもの」との潜在意識から「急がぬ荷物は着実に届けられればそれでよし」と。改めて考えさせられた見学会であった。（馬場義雄）